

第1回栗東市観光振興会議 会議概要

- 日時： 令和元年6月17日（月） 午後3時00分～午後5時00分
- 場所： 栗東市役所3階談話室
- 出席： <委員>
田中由美委員、岡山光雄委員、林優里委員、藤岡光人委員、船橋寛明委員、
鶴田泰伸委員、山口翔太郎委員、築地達郎委員、福島森委員
<事務局>
環境経済部西村部長、商工観光労政課駒井課長、商工観光労政課濱田係長、
商工観光労政課事務局担当 中野、佐藤
しがぎん経済文化センター 稲木氏、長山氏

1. 開会

(市長挨拶)

2. 委員の委嘱及び委員紹介(資料1・2)

3. 会長及び副会長の選任について(資料2)

(会長を築地達雄委員、副会長を田中由美委員に選任。)

(会長 築地達雄 挨拶)

(副会長 田中由美 挨拶)

4. 案件

(1) 会議の公開にかかる取り扱いについて(資料3)

本観光振興会議の公開・非公開について、公開。

事務局より、本日の傍聴者は0名と報告。

(2) (仮称)栗東市観光振興ビジョン策定について(資料4・5・6・7・8)

・(仮称)栗東市観光振興ビジョン～「栗東市観光振興ニーズ調査」分析結果をふまえた本市観光振興の方向性～(基本構想)(資料4・5・6)

・今後のスケジュールについて(資料7)

(事務局より説明)

会長： 昨年の議論の振り返りとご意見などを交わしたい。昨年の会議に参加されている方が多いが、事務局から説明のあったことも含め、これから栗東市の観光振興に向けてそれぞれの立場で思うことを、お話しいただきたい。

委員： 私は2期目で、前回の会議は主婦の視点や、事業所を持っている視点で提案をさせていただいた。この木の図も私が会議の中で走り書きをしたものを事務局の方で図案化していただけたので、ありがたく思う。

観光資源を掘り下げること大事だが、ハード面とソフト面をバランスよく、いかに観光客の方に栗東市にお金を落としてもらおうかという点が、最終的には栗東が豊かになり、さらに発展していくことに繋がるので、そのための仕組みを皆さんに様々な立場から意見をいただき、磨き上げていきたい。

委員： 私も2期目で、栗東市に何があるかということから前回もお話ししたが、自然を生かした観光、例えば、金勝の自然に触れ合いながら、たくさんの人ではなく一部の人でもいいので、特徴のある観光の仕方というのがあるのでは。

「馬のまち・栗東」と先ほど市長から話があったように、実際「馬のまち・栗東」と手原駅に書いているが、何もできていない状況だ。マンホールカードの配布なども一部の方しか知らない。私たちでも、何か行われていても理解していないことが多いので、それを広報し、知ってもらうことが重要だ。

栗東市の方々にこのような取り組みを知ってもらい、その上で新しく観光に向けての取り組みをしていくべきではないか。栗東の人が何も知らず、「いつの間にそんなものができたの？」というようなことではなく、まず栗東の人に理解してもらい、それから進めれば良いと思う。

委員： フォレストアドベンチャー・栗東という施設が金勝山にある。ハーネスをつけて木の高いところに登り、渡り、滑って遊ぶレジャー施設。

そこを運営してお客さまに来ていただいているが、カフェ・アプリと一緒に、お客さまにどのようにすれば市内で食事や宿泊をしてもらえるのかと考えている。この会議を通して、皆さんとつながり、私たちがふだんやっていることを一緒に栗東市の観光につなげていきたい。

委員： 私どもは道の駅を運営しており、フォレストアドベンチャーが来たおかげで潤っている。

フォレストアドベンチャーを含め、金勝山はハイカーの方がたいへん多くなった。結局はターゲットを絞った取り組み、そして文化と歴史という部分。先ほど指摘があったように地元の人が知らなければいけません。地元の方で近隣の大阪や京都で勤務されている方が、栗東にはこういうものがあるよと言えるような文化、歴史をつくっていったらどうでしょう。ターゲットを絞った取り組みを行っていかないと考えている。

会 長： ターゲットという言葉がキーワードですね。

委 員： 去年まで、栗東市観光物産協会と一緒に、観光の磨き上げのためのまちづくり事業をさせていただいた。その中で、今まで県内でも栗東市は観光客が少ない中、既存の観光地はもちろん、それ以外にも、アクセスが便利ということもあり、これまで目を向けていなかったカフェや、若い方々が来ていただくような施設があるという話が出た。大野神社をはじめ、新しい取り組みもされているので、それを生かせるような発信を、住民を巻き込んで行う仕組みづくりについての話もあった。

また、いかに消費単価を上げるかというお話もさせていただいた。宿泊客数とその消費単価が少ないが、そこはキャンプ場も入っているという話だった。宿泊施設をすぐにつくるというのは難しいと思うが、その中でいかに消費単価を上げていくような仕組みづくりを計画にし、皆さんに儲けていただく。観光も、地元民が納得できる、観光公害ではないところへ計画の中で持っていけたらというお話をさせていただいた。

会 長： 先ほどおっしゃったのは、「インスタ映え」のことですね。「インスタ映え」スポットが、多いそうですね。

委 員： 「インスタ映え」もあります。若い人に取り込んでもらいたいということもあると伺いましたので、新しい桜の名所の見せ方もあるという話もさせていただいた。

委 員： 数値情報、実態調査をされているが、本当にこれは根拠になっているのかというのが正直な感想だ。なぜなら、今お話があった中でも、フォレストアドベンチャー、大野神社の来客数は入っていない。かなりの誘客をしているという実感があるにもかかわらず、全く出てきていない。調査箇所を見させてもらう限り、「こういう答えになるだろうな」というのが正直なところだ。そこにしか行っておられない、次に行くような場所で聞いていない。それをもとにした中での議論、栗東市における観光客の動向というものが、今の本当の実態をつかんでいるのかというのが正直な感想、疑問だ。

去年から、フォレストアドベンチャーもやっておられますよね。大野神社に来る人の数も、去年、かなりのピークがあったはず。たくさん来ているにもかかわらず、「次に行く場所がないけど、どこへ行ったんだろう」というのは、このアンケート調査の結果にも出てこない。多分フォレストアドベンチャーも、

フォレストアドベンチャー目当てに来られているのであって、それ以外のところに魅力があるのか、ないのかというのがこの結果を見る限りはわからないという部分もある。

また、関連産業実態調査のアンケートは商工会の会員に送ったということですが、会員数からすると現状で観光をなりわいにされている方というのがどれだけいるのか、疑問だ。

この観光をどこまで含めるのか。「飲食も観光」を含める場合に、本当に観光事業としてやっていきたい方が、栗東市内に本当にどれだけいるのかということも疑問に感じる。

商工会では毎年、バル事業を行っている。これも観光ととらえたら、年々参加店舗数は減ってきている。自分のところの枠さえ確保できれば、商売的に問題ないと思っている方もたくさんおられるのかなという印象がある。そうしたときに、先ほどの経済効果という話で先生が言われたように、本当に数字だけを追い求めていいのかなと疑問に思う。

栗東市は昔から「交通の利便性」が良いと言われているが、そうであれば、滞在型を求める必要があるのか。「便利だからこそ次への目的地へ行く」というのが当たり前の中で、滞在したいような魅力ある場所ができれば滞在型につながるが、インフラ設備が整わない中で、ビジョンの第1の目的が滞在型を増やしていくということは、正直、難しいところがあるのではないかと。改めて、数値的な情報から様々なところも含めて、実態と市内の状況とをあわせて見ていかないといけないのではないかとというのが正直な感想だ。

会 長： 私も正直、新参者としては同じような感想を持った。この後の議論で少し深めていけるのではと思う。

委 員： 観光物産協会の事務局として、栗東市の観光に携わって現場で動いている。平成28年度の時点で「地域資源活用ビジョン」を栗東市でつくられており、去年行われていた会議以前の流れも会議の中で生かしながら、次の世代に引き継ぐようなビジョンが描かれると一番いいと思う。

活用ビジョンだけでなく、総合計画やマスタープランもあり、さらに総合戦略も栗東市では策定されているので、これらと観光振興ビジョンとのかかわりをどういう位置づけにしていくか。今後、つくって終わりにならないよう、そのサイクルが回る計画になれば、現場サイドとしては動きやすくなる

会 長： 観光物産協会の会員数は、今、どのくらいか。

委員：平成18年に観光協会と特名産振興会が合併した当時が最大で130弱、その後、年々減少し、一番少ないときで94まで減った。昨年少し持ち直して、今は103だ。

会長：商工会の会員とはかぶっているのですね。

委員：ほぼ、かぶっています。

委員：103人のうち、本当に観光業をやっている会員は、どれぐらいか。

委員：観光をなりわいにされている方は、ほとんど皆無となる。

委員：そのような方向も少し含めての議論になると思う。

会長：私もきょう、問題提起したい論点はそこだと思っている。

委員：今ほどご説明いただいた、ビジョンに向けたニーズ調査だが、県としての課題認識と栗東市の課題認識と大分重なるところがある。特に今、観光が県庁の中でも、人口減少、地方の疲弊と言われている中で地方創生の切り札だという位置づけで、非常に期待も高まっており、ある意味プレッシャーも高まっている。これは市も同じような状況ではないかなと思う。

そこで、私どもの観光のビジョンでも、交流人口を増やして地域の活性化、地域経済の活性化を図ることを目標にしている。そのために、消費単価を上げ、どのようにすればそこにお金を落とさせていただけるのかという観点で、県庁としても施策を進めている。

これは全く同じだが、県全体で考えてもやはり宿泊者数が少ない。ほとんどの方が日帰り。宿泊者の単価は県全体で約2万6,000円だが、日帰りの方は4,600円と大きな差があり、宿泊客を伸ばすことによって地域に落ちるお金を増やしていきたい、これが今までの計画だ。全国と県の比較を見ると、確かに、宿泊者数を増やすことで総消費額は増やすことができる。しかし、栗東市と同じく、県全体でも交通の便が良く、「ふらっと寄りやすい」というのも強みの一つだろうと考えている。

実は、日帰り観光客だけで考えると、滋賀県は全国の中間値より上だ。日帰り観光客の方が落とす観光消費額総額で比べると、これも全国の中で中間値より上だ。そのため、ふらっと寄っていただきやすいという特徴をつかまえ、多くの人に来ていただくことにより、お金を多く落としてもらおう。この観点も、

宿泊者数を伸ばすことと並行して考えていかなければならないのではないかと。

このときに効いてくるのが、日帰り客の消費単価だろうと思っている。県全体では5,500万人の方に来ていただいているため、消費単価を10円上げれば県に落ちるお金は5億円ふえる、100円上げれば50億円、そのような観点でどうにか消費単価を上げていきたい。そのためにどうすればよいのかと考えると、やはりせっかく滋賀に来たんだから、「ついでにここにも行ってください」「ここに来たらこんなおいしいものがあるから、これを食べてください」と、つなぎ合わせることで消費額は絶対上がっていくと思う。

ビジョンの「基本的な考え方」で書かれている滞在型観光、これは宿泊だけではなく、要するに栗東の地域にいる時間を増やす、栗東の地域で回る地点を増やすということも滞在型観光になると思う。

この考え方①や④に絡めて、フォレストアドベンチャーに来られている方が非常に多いなら、「せっかくここまで来てくれたのなら、あそこがいいカフェがありますよ」など、それぞれの場所で皆さん、情報がつながっていると考えるので、具体的に、本当に効率のいい旅の仕方などの発信を皆さんからしていくことで、「ついでにここも寄ってはいかがか」となっていくのでは。それを通して、落とすお金が必然的にふえて消費単価も上がっていくのではないかと考えている。

これから県全体でそういう施策を打っていきたいと思っており、栗東市ともその点で連携させていただきたいという願いが一つだ。

もう1点、ことし9月から『スカーレット』の放送が始まる。これは大阪と信楽の結びつきが強くなるので、県としては、大阪から信楽に人を送るため、様々なプログラムを打っていく。しかし、県で見ると、信楽・甲賀だけで今回の『スカーレット』効果が終わってしまっただけではいけないので、それを全県に拡大していく施策もあわせて打つつもりだ。特に栗東市は草津線沿線でもあり、ぜひとも『スカーレット』が放送されるという機会を県と一緒にとらえ、ここに降りていただく人も増やすという観点でやっていきたい。

会 長： 今年度の事業計画の中にそういったことが入っていなければいけないですね。事務局からも一言いただけますか。

事務局： 先ほどご指摘いただいたニーズ調査だが、これは少しやり方が不十分ではないか、数字はどうなんだという点は、確かにそのとおりだ。ただ、私が感じたのは、この数字が正しいかどうかというより、今回改めて「栗東は、観光は弱い」という点について、おそらく、皆さんの共通認識として持っていただいたのではないかと。先ほど、市のほかの関連施策という話があったが、

今、栗東市で一番大きい総合計画があり、その中で、栗東市民の方にもアンケートをとられており、市民の声として「観光が弱い」ということも出ている。

栗東市観光客ニーズ調査は、栗東に来られた方にアンケートをとった声。関連産業へのアンケートは、栗東で商売をされている方の声。そして、栗東に住んでいる方の声。どれをとっても皆さん、栗東は観光が課題というところは共通すると思う。そういう意味では、観光を何とかしていこうという思いで皆さんが一致してこれから進めていければ良いと思う。

事務局： 確かに、皆さんからいただいたご意見や昨年の調査から見ても、宿泊よりも日帰りの人のほうが割合も多い。5年間の計画の中で滞在型観光を考え方のひとつとして挙げているが、皆さんのご意見に共通であったように、磨き上げるところ、土台の部分をつくって、そこにまず来ていただく。そこから点を線につなげ、積み上げていくことがこの5年間で重要なのではないかという認識は、皆さん、共通ではないかと思う。

皆さん、栗東の観光は弱いよねということがあったが、それを一つずつ積み上げて自信を持つ。最終的には、「栗東市、こういうところがあるよね」という方向に持っていけるような5年間の計画にしていきたい。

事務局： 今までの調査結果やご意見をお聞きする中で、やはり、委員の皆様も市民の方も共通認識で「栗東の観光は弱い」と思っておられるのではないかと考えている。

観光は外から市内に人に来ていただくことも重要だが、市内の方にも栗東のことをもっと知ってもらい、栗東を訪れてもらって、周りのほかの人を連れてきてもらうことも重要になってくるのではないかと思う。そういったことも含め、磨き上げや情報発信の方法などを今回の会議や、その後の5年間で行っていきたい。

事務局： 私も地元が栗東で、ここに何十年住んでいますが、昔から、観光地かと言われるとそうではない。ただ、自然観察の森であったり神社であったり、いいなと思う場所はたくさんあり、自然も非常に豊かだ。今までは観光地ではないと思っていたが、最近、フォレストアドベンチャーができ、今までそのような雰囲気施設の施設が栗東にはなかったので、こういった新しい流れをつくれるんだなということを感じた。

こういった議論の中で、新しい何かを生み出す、またはもともとある何かを磨き上げれば、小さなきっかけでもいいので、少し変わったと市民の皆さんが思ってくれることもできるのではないかなと思う。そういった何かをこの会議、

ビジョンの中でつくっていききたい。

事務局： 栗東というどうしても馬ということが連想されると思うが、先ほども市長が挨拶で言っていたとおり、競馬関係となると観光施設ではなくトレーニング施設になる。それを払拭した、観光客を誘客できるような何か一つのきっかけづくりをこの議論の中で行っていききたい。例えば、大野神社のように嵐がきっかけで観光客がたくさん来られるようなこともあり、そういう何かちょっとしたきっかけで栗東を知ってもらえるというところも出てくるかと思う。皆さんにご意見をいただきながら、きっかけづくりをしていきたい。

事務局： 皆さんがおっしゃっていただとおりで。今までは、イベント、様々な催し、観光施策、そういったものはあくまでも一過性のものであったという認識だ。そこから、先ほども意見をいただいたが、点から線ということで滞在時間を増やしていく、1カ所にとどまらず次のステップに行ける、ストーリー性を持った施策の展開を行っていききたい。ただ、欲張ってあれもこれもというわけにはいかないで、例え一つでもAからB、BからC、CからD、こういったルートが仮に一つ、この計画の中でつくれば良いと思っている。

5カ年の計画だが、まずは来年度どういったことができるか、そして次のステップへという形で5カ年間の計画策定、皆様方のお知恵を拝借しながら、ストーリー性を持ち、ターゲットも絞ったという施策展開を立案していきたい。できたらそういった形でご議論をお願いしたい。

事務局： 私は昨年まで4年間、観光の担当をさせていただき、観光振興会議も含めてしっかりと議論ができる場をつくっていかねばならないという観点で、今回、委員の皆さんをお願いしているところだ。

商工観光労政課長になって感じたのは、栗東市の観光に対して、まず実態がわかるようなデータがない。それから、目標を持っていない。例えば、地域資源活用ビジョン、あるいはシティーセールス戦略、地方創生の総合戦略、総合計画と様々な計画があるが、個別計画の目標を達成するために観光という手段を用いた計画ばかりだ。ところが、観光という部分の計画は実は栗東にはない。そこで、目標を市民の皆さんも含めて意見を聞きながら作成しないといけない。栗東市はあれもこれもできない状況だ。そのために、実情を知るためのアンケート調査、そして、ビジョンの作成、そのビジョンは継続的に、委員の皆さん、市民の皆さんの意見を聞きながら作成していく。こういうものをまずは整えていかないと、前へ進めないという思いがあり、進めてきた。

先ほど、アンケートのとり方についてご指摘もいただきました。確かに、そ

のとおりだと思いますが、まず、そのきっかけづくりができたというところでは一歩前進したのではないかと。当然、このアンケート調査についても、継続して行うべきだと思うので、皆さんの意見を聞きながら精度を上げていきたい。

会 長： その他にご意見はいかがですか。

委 員： 栗東で商売をさせていただいている立場から、先ほども少し申し上げましたが、観光業に参入する事業者は少ない。自社で十分回っているからだ。しかし、世の中の流れはおそらく、この商売をやり続けていてもだめですよ、新規に観光業とかにも参入する土台をつくらない限りは、これからインバウンドやそういう需要を取り込まない限りは、商売が成り立たないですよ、商売が成り立たないということは税金が落ちないですよ、税金が落ちないということは自治体が潤わないですよ、という方向にある。栗東は、多分その危機感が正直、全く皆無になっている。

例えば、長浜の黒壁は、地元の地場産業の方々が自分たちの商売、浜ちりめんなどだけではなく、人を呼び込まなければだめだと感じて、黒壁をつくっていかれた。

観光振興を進めるためには、そういうことも含めた土台がまず必要だ。危機感を持たない限りは、観光事業に事業者が参入しない限りは、振興していこうとしても絵に描いた餅だ。他府県や大手が参入してきて、市外に税金が落ち、消費税も落ちるといふことにもなりかねない。「地場育成をするためにはどうしたらいいのか」という視点が抜けるとだめなのではないか。商売をやっている立場からお願いしたい。

事務局： 今、委員がおっしゃったのはもっともなことで、その危機感を我々、行政の職員が持つことが大事だ。今回とらせていただいたアンケートは決して完璧ではないが、観光客が少ないという部分に加えて、観光客の消費単価というのが非常に低い。そのごくわずかな観光消費が、域外へほとんど出ていってしまっている。つまり、域内調達率が非常に低いところがある。要は、観光客が消費してもそれが全部、市外に流出してしまっているというのが、今回のアンケートの中で見えてきた。

つまり、観光客が多くなればその部分は上がるが、現状の観光客でも、構造的な部分、域内調達率を上げることによって変わってくる。実際にアンケート調査からその現実を知り、それを公表していく。栗東としては、これは工夫次第で成長戦略になるというものをしっかりと位置づけていかななくてはならない。

その辺はぜひとも皆さんのご意見を頂戴して、観光振興というものが栗東市の成長につながるものにしていきたいという思いは強く持っているということをお願いしたい。

会長： 私はもともと新聞記者で、日本経済新聞を皮切りに自分でつくった新聞社をやっていたこともあるが、経済記者として、企業の現場をくまなく歩いてきたという経験がある。

そこから感じるのは、観光振興といったときに、観光入込客数、つまり一人一人の観光客が落とすお金そのものに群がるというビジネスも当然あるが、そういう観光産業を支えるための基盤的な、つまり B to B という分野のビジネスのほうが、裾野が広いということだ。ゴールドラッシュの後、金は結局出なかったけれどリーバイスだけが残って巨大な企業に成長していったという事例が象徴的だが、そのようなインフラを担っていくようなビジネスのほうがおそらく、収益力も高く、普遍性もある。

例えば、私は大津に妻の実家があり、職場も大津であるので、国道1号沿いに京都と大津をよく行き来するが、京都から大津に入ったすぐのところに、リネンサプライというホテルで使うシーツなどの洗濯を専門にされている会社がある。そこは今、本当に寝る間を惜しむような仕事ぶりではないかと思う。京都のホテルラッシュを反映して、インフラを支える部分で収益を上げているのではないかと思う。

私が問題提起をしたいことは、「観光産業とは何ぞや」ということの捉え直しをしていきたいという点だ。広く、あるいは深く、観光産業というものを栗東流に定義し直し、そこを伸ばす。栗東としての産業政策の中にしっかり根づいた形の絵を描いていくということを提案したい。皆さんから出てきたご議論も、基本的にそういう方向を向いていたのではないかと思う。

「観光が弱い」という言葉が多くの方から出た。弱いというのは、例えば雇用の創出が34名という数字が出た。これは確かに小さいが、「観光が弱い」ということを意味しているのではなく、栗東の産業構造がそういうところを向いていない、そうではないところに強みがあるということだと思うので、そういう方向で議論をしていきたい。

また、企業の現場を見てきて、今、大学の教員として企業が発信する情報を引き続き追いかけているが、企業博物館及び工場見学、施設見学が、観光資源として非常にパワーアップしている。JRの鉄道博物館が典型や自動車メーカーもそれぞれ持っているが、非常にお金と力と知恵をかけてつくっていている。このエリアにはたくさん工場があるが、製造業が強いまちの強みを生かしていきたい。

現在進行形で工場見学というのは面白いため、ここに立地されている企業にそれぞれ一つずつ、全部の工場さんに1本ずつ工場見学ルートを考えてくださいと言うだけでも、あっという間に観光資源が出てくるかと思う。まず、JRAに馬の博物館をつくってもらわなければならないと思う。

もう1点、シティーセールス戦略会議の議長もしている。そちらは栗東市のコア会議の一つだが、シティーセールス戦略会議の方向性としてははっきりと打ち出すことにしたことは、「シティーセールスのターゲットは、栗東市民である」ということだ。まず、栗東市のシティーセールスは外に向けた発信というよりも、むしろ市民に対して、あるいは市に直接出入りされている方に対してセールスしていく必要があるということだ。栗東市の魅力を認識し、認識を深めていってもらわなければならないという方向で、取りまとめをしている。

まとめていただいた方向性を踏まえた議論は、一応出尽くしたと思うが、よろしいか。

それから、昨年度の議事録の概要を拝見し、その中に、きょう事務局からの報告にはなかった点で、大事ではと思うことがある。木の図で五つの項目が挙げられているが、このうち1番はこうなろうという目標、あるいはビジョンというものを示したもの。対して、2、3、4、5は1を実現するための方法、手段に触れているものという層の違いがあるように思う。そういうご発言が、昨年度の委員の中からあったようだが、私も同感だ。

そこで、この図も幹のところは1番が来て、2、3、4、5のところの施策から、具体的な観光産業や観光ビジネスというものが生まれてくるのではないかと思う。例えば、「人の育成、人づくり」というのがあるが、これは我々も属している教育産業の領域や様々な産業が生まれてくる可能性があるだろうと思う。

・令和元年度主な観光振興関連事業の取り組みについて(資料8)

(事務局より説明)

会 長： 資料8の今年度の主な事業の取り組みは、報告事項という認識でよろしいか。この会議で承認する必要はあるか。

事務局： これは、今年度この方向で実施をさせていただきたい。また、この内容についてご意見がありましたら、考慮する中で見直し等も行っていきたい。

会 長： 了解した。皆さん方からご意見があればいただきたい。

委員： 多言語観光案内システムの案内内容の更新ということで、私どもも QR コードのシールをいただいた。コードを読み取ったら多言語で栗東市内の観光地がわかるということで、英語はできるが中国語やその他の言語はないということを書き加えてくださいとお願いし、参加をしている。参加されているほかの観光地、観光場所は、外国人の受け入れ態勢はできているのか気になっている。

私どもも、英語ができるスタッフはいるが、今は香港からの来客が多く、香港は英語のできる方もいるが、広東語しかできない方もいる。受入態勢がまだ不十分な点が多いので、ここをご協力いただけるのかということだ。

会長： 対応できる範囲でしていただければということですね。

委員： 少し対応が難しいとは思っている。

会長： やみくもに多言語化するだけだと、現場が困ることがあるというご指摘だと思う。そのほか、いかがでしょうか。

委員： 資料2の振興会議設置要綱の中の2条に、この会議で「観光案内所の運営に関すること」というので、何らかの形で提案をしますということが書いている。先ほどのスケジューリングの中では、一切触れていないが、何か議論しなければならない点があるということか。

事務局： 昨年度まで、栗東市観光案内所の運営会議を別途設置する中で、商工会、観光物産協会、その他関係の機関の方においていただいていたところだ。今般、新たに設置させていただいたこの振興会議の中で、観光案内所の運営に関する内容についてもご意見をいただきたい。本日は、取り組み内容ということでお示ししているが、今後、課題等が当然出てまいりますので、そういったものをこの振興会議の中でお諮りさせていただき、次年度以降、また今年度の事業についても、事業展開につなげていきたい。

会長： 「運営に関すること」という規定を普通に読めば、運営が正しく行われているかどうか監査のような役目をこの委員会が持つと読めるが、そうではないのか。意見を言うだけか。

事務局： 運営に関してご意見をいただき、それを参考に観光案内所のよりよい運営に努めていきたい。

会 長： この損益責任をこの委員会が持つというものではないということですね。

事務局： はい、そうではない。

事務局： 一つの考え方として、手原駅に観光案内所があるが、そこにあること自体がどうか、栗東駅にも観光案内所が必要ではないか、乗降客は3倍以上違う、という意見もある。駅の近くではなくても、例えば和中華本舗に観光案内所を設け、歴史と文化のまちをPRしながら観光客にも様々なご案内ができるというのでもいいのではないかなどの意見もある。

このようなことから、観光振興ビジョンを議論していただく中で、観光案内所の機能そのものがどうあるべきかという、広い視野でご意見もお聞きしたい。

委 員： この委員会は、理事も含めて物産協会の方がいらっしゃる中で、どういう議論をすべきなのか。観光案内所の運営を外部に委託されているということは、何らかの費用対効果を栗東市さんが求められた上での委託事業となったのだと思う。

確かに、栗東駅でお土産を買う場所がないという話が、別の機会に出たこともある。どこかへ何か持っていこうというときに、「皆さん栗東駅から電車に乗って出張するのに」という話をしたことがあるが、そういうことも含めて、ニーズと実情に合った運営を、委託業務がどこまで担っているかやわかりにくい部分があるため、明確にした上でご提案いただきたい。

会 長： 個人的な考えだが、草津駅にある草津市の案内所の隣に栗東市の案内所を置いたら良いと素朴に思う。市外でもいいのではないか。

委 員： 商工会では草津駅を出たところに、栗東市にも賛同いただき、栗東の観光PR板のデジタルサイネージを置いている。

会 長： そのような議論についても、今後、意見を交換するということですね。

事務局： 栗東駅と手原駅から乗降客をたくさん増やしたいので、栗東駅か手原駅でという思いもある。

事務局： 今の観光案内所の運営の検討については、また資料をご用意し、当然、成果といったものもお示しさせていただく中で、いろいろとご意見を頂戴したい。

委員： 4番の広域連携のところに書いている、「食をテーマとしたツアー商品の開発及び活用」や「広域観光キャンペーンへの参加」は、県で考えている戦国キャンペーンなどをイメージされているのか。県でもことし11月から戦国キャンペーンを展開するので、うまく活用していただきたい。また、食をテーマとしたツアー商品の開発は物産協会ですられるということか。

事務局： これは、湖南地域観光振興協議会の取り組み内容を記載させていただいたものだ。

委員： 商品の開発はそこでできるのか。

事務局： その方向で進めている。

委員： ビジターズビューロー総会での大沼先生の講演会の中でも、食をテーマにいろいろ展開していくことでおもしろいキャンペーンができるのではないかというお話があった。うまく連携したい。

事務局： ぜひお知恵をお借りしたい。

会長： 『スカーレット』効果を期待しようと思うと、いつごろ、どのような動きをしないといけないのか。

委員： この9月に放送が開始される。県としては6月議会に補正予算を上げており、それが決定すると、オープニングに合わせて「大阪から滋賀へ、ドラマヒロイン追体験プロジェクト」という、大阪から信楽に行き、信楽で陶芸の道を歩んだというストーリーを追体験するようなプログラムを打つ。そこで多くの人を誘客しようと考えている。

ドラマ放送の開始時期は、皆さんの注目が非常に高まるタイミングであり、そこは県としては外したくない。そこでプロジェクトを打つ。その後も信楽に行った方を全県に広げていく事業を展開する。9月というのは大きなタイミングになると思う。

会長： ドラマの流れとしては、先に信楽か、大阪か。

委員： 大阪始まり、信楽、そしてまた大阪に戻って、もう一度信楽に来るという流

れになるようだ。

会 長： 田舎から都会へ上っていくという通例とは異なるパターンですね。2回か3回、チャンス、山があり得るということですね。

今年度事業に関しては、随時、思いつくことがあれば事務局にフィードインして、実現してってもらいたい。逐次、進捗や新しい動きはご報告いただくということをお願いする。

先ほど、事務局からご提案があった計画の名前だが、設置要綱に文言として「栗東市観光振興ビジョンに関すること」と書かれており、「栗東市観光振興ビジョン」以外の名前はつくりにくいのが現実だ。

あえて申し上げますと、ビジョンというのはつくるものではなく、でき上がるもの、様々な人の心の中にでき上がっていくものだ。ビジョンは“見える”という意味で、「こんなふうに見える」「未来はこうだ」というのがビジョンであり、ビジョンを行政がつくるというのはある意味、役回りが違うように思う。ほかの行政機関も含めてビジョンという言葉が多用されているが、できる限り慎重に使いたいと思う言葉の一つだ。

そのことを申し上げた上で、これが落としどころとしていいかと思うので、この（仮称）をとるということでよろしいか。

委 員： （了解した。）

会 長： では、「栗東市観光振興ビジョン」とさせていただきます。

(4)その他

会 長： 先ほど事務局から説明があったスケジュールについても私から提案をさせていただきます。

全体で6回もの会議が設定されており、結構密度の濃い会議だと思うが、きょうの議論は、基本的な考え方、思いというものを平場に出していただいたところだ。それを踏まえて、次回、ビジョンの骨子を改めて考える機会を設けさせていただきます。

5つの方向性というものが出されているが、これをもとにどういうビジョン、要するに夢を描くのかということについて、もう少し議論をする必要がある。

京セラの稲盛和夫氏だと、「総天然色になるまで考える」という言い方をされる。総天然色というのは、昔、映画は全部モノクロでしたが、やがてカラー映画が入ってくる。しかし最初は、フィルムが高いので一部だけがカラーだっ

た。最初から最後まで全部カラーで映画をつくれるようになったのは、古い昔ではない。稲盛氏が生きていた世代は、全部カラーになるというのはすごいこと、全て隅々までリアルに見えるという状態を意味する。

ビジョンを描くときには、5年後という政策であれば「5年後、本当にこうなっているだろうか？」というところをリアルに描かないことには、何も動かない。次回は、さらにざっくばらんにどういうビジョンを描くのかということを議論いただき、それを何本かの柱として立てるという作業を皆さんとしたい。

それを踏まえ、3回目、4回目に成果指標の設定を行う。例えば「子どもの笑顔がふえる」とか、いわゆる KPI と言われるものだ。KPI は、本当は数値目標ではないものに無理やり数値を当てはめて、可視化するという方法である。「みんなが気分がいい」ということをどうすれば把握できるかというときに、それを「しゃべりながら歩いている人がふえている」といった評価指標をつくっていく。そこでどういうセンスを、特に人文学的センスをどう発揮するかということに、おもしろ味があり、難しさがあるが、これができるればきつとうまくいくと思う。それをぜひ知恵と創意工夫を尽くして皆さんと一緒に考えていきたい。まずは事務局に成果指標の案としておもしろいものを出していただきたい。栗東市で滋賀県全体の KPI のモデルをつくってやるというぐらいの勢いで、ぜひやっていただきたい。

委員： 平成 28 年の栗東市総合戦略に、観光事業の推進にかかわるところで KPI が既に設定されている。平成 26 年の段階で、「観光振興するまちづくりが推進されていると思う市民の割合」が、当時の 22.1% を平成 31 年度には 30% に引き上げるということで、既にそれは一度設定されているものがある。おそらく今年度中にこの数値を測定されると思うので、全く別の数値をというより、過去のことをちゃんと踏まえながら、今後、議論できるといいのではと思う。

会長： そのとおりだ。過去の積み上げからの演繹的な目標設定と、こうありたいという夢の側から割り戻していく目標設定の両立で考えられたらいいのでは思う。こういう場では多くの時間をかけて議論ができるわけではないので、事務局から各委員に問い合わせるなどして、ぜひおもしろいものを考えていただきたい。

それを3回目、4回目ぐらいに行い、5回目でパブリックコメントや議会に説明していくためのビジョンの実際的な素案を確認していくという流れになるかと思う。

最後の1月は議会直前になるので、パブリックコメントを踏まえて議会に説明していくための最終的なものをつくっていく、議会での議論を踏まえてビジ

ョンを公表していくということになる。

事務局： 第2回振興会議は、7月下旬頃で開催をお願いしたい。改めて日程調整させていただく。

5. 閉会

(環境経済部長挨拶)